帰国子女の適応に関する研究

今　村　友木子

問題及び目的

これまでの帰国子女の適応としては心理的傾向がその指標とされたものや，学習適応について調査されたもの，あるいは心的適応，社会的適応を合わせて尋ねたものなどがある。本研究において帰国子女の適応について考えるにあたっては，異文化を体験したことの影響によって生じる日本文化への適応についての側面もとりいれられるべきであると考えた。そこで本研究では，帰国子女の情緒的側面，学校環境，日本文化的側面における適応感を適応としてとらえた。ここでいう「適応感」とは反町(1991）の「個人の主観的世界における環境生活に対する安心感，充実感」という定義に基づくものとする。

帰国子女の適応を異文化適応という側面からとらえるにあたっては，留学生の適応研究が参考にすることができると考えられる。海外における留学生の適応研究においては，1970年代以降は留学生の友人関係と適応が焦点となり，現在でもこれが中心的関心である。特に留学生が滞在国の学生と友人関係をもつことによって，その文化をより理解し，適応しやすくなることを実証するための研究が多い。この仮説は異文化適応の交流仮説とよばれ，最近ではソーシャル・サポート・ネットワークとストレスを中心に検討されている（田中ら，1990)。

本研究ではこのような研究を踏まえながら，帰国子女の適応に役立つものとしてどういった要因が考えられるのかをおもに帰国子女の現在と海外滞在時のソーシャル・サポート・ネットワークを中心に検討することを目的とする。

研究1

帰国子女の現在のソーシャル・サポート・ネットワークが適応にどのように関わっているかについて質問紙調査を実施して検討した。仮説1. 帰国後の経過時間が短い生徒（18カ月以内）では，一般生からのサポートよりも帰国子女からのサポートが強く適応に結びつくであろう。仮説2. 帰国後の年数が多い生徒（19カ月以上）では，一般生徒からのサポートが帰国子女からのサポートより強く適応に結びつくであろう。

調査対象者は帰国子女入試枠のある高等学校10校（公立7校・私立3校）に在籍する帰国子女562名。このうち帰国後61カ月以上経過している者，または帰国時の年齢が12歳に達していない者は除外したため，最終的には334人を分析対象とした。

学校別では公立外語短期大学の付属高校であるGa高校の対象者の学校適応の値が有意に高く，また多くのサポート源からソーシャル・サポートを最も多く受けていることが示された。この学校では普通科と貿易外語科を設置し，教育課程のなかでも外国語教育の充実が強調されており，英語の他にフランス語またはスペイン語が第二外国語として併習されている。このような特徴的な教育体制の中では一般生徒も海外についての関心が高く，帰国子女に対する意識も高いであろう。またさらにそのような環境のなかでは帰国子女同志でも海外生活の話がしやすいということが考えられる。その他の学校でも英語科や国際教養科などを設置している学校において周囲の一般生の海外についての関心が高いことが語られた。

外国滞在時の通学形態では日本人学校のみに通学していた者の学校適応が有意に低く，現地校のみに通学していた者の学校適応が有意に高いことが示された。日本人学校に通学していた生徒は日本に帰国する際あまり困難を感じないと思われがちであるが，そういう者には現地の言語を自由に話せる者は多くなく周囲の人が期待するほどの「帰国子女としての特性」を備えていないために，かえって適応感が低くなっていると考えられる。

適応感を規定するサポートについては，帰国子女の友人からのサポートが負の影響を及ぼしていることが示され，仮説1は支持されなかった。帰国子女があまり身近に多くない状況の対象者らが，同じ学校内にいる帰国子女ではなく滞在国の日本人学校や補習校で知り合った友人で既に帰国している親しい友人を想定したということが，このような結果が示された原因と考えられる。このような海外滞在時代の「帰国子女の友人」との間のサポートが多いということは，今現在の生活よりも海外滞在時代を懐かしむ気持ちが強く，その頃の生活の方に価値を見いだしていたりすることが考えられ，今現在の適応感に対しては負の規定力を持ったのであろう。

本研究では帰国後19カ月以上の帰国子女のソーシャル・サポート・ネットワークの広がりとして一般生の友人を挙げていたが，一般生の友人はもっと早い時期にネットワークの中に組み込まれこの時期には異性の友人・恋人

がネットワークに加わっていることが示された。そこまで関係性が広がることが適応感に対して正の影響を及ぼしていると考えられる。この段階では帰国子女の友人からのサポートがほとんど影響を及ぼしていないことも重要な示唆であり，この点については仮説2を部分的に支持していると言えよう。

研究2

研究2では外国滞在時のソーシャルサポート・ネットワークのあり方，滞在国の学校，現在の学校などのさまざまな状況が帰国子女の帰国後の適応感に対して与えている影響について検討することを目的とし，半構造化面接を行った。研究1において面接調査への協力意志が表明された56名のうち18名を対象とした。

本研究の面接対象者の中で全体的な適応感が高かった者の多くが現地校に通学した経験を持ち滞在国の友人があり，現地校の経験がない者も滞在国の人々と非常に密な交流をしている。さらに彼らの多くは現地の言葉も不自由しない程度に獲得している。このようなことから彼らは「その国で生活してきた」という確かな実感を持っていると思われ，それが帰国後の適応感に影響を及ぼしていると考えることができる。

また日本人学校出身者は，同じ体験を持つ日本人学校時代の友人の方がつき合いやすいと感じ彼らと頻繁に連絡をとっていることがわかった。この点は現地校出身者と大きく異なるところである。現地校出身者も補習校などで日本人がソーシャル・サポー・ネットワークに入ってはいるが，それが全てではないため帰国後もそんなに密な関係はみられない。日本人学校出身者は海外滞在時のソーシャル・サポート・ネットワークのメンバーをそのまま，帰国後の生活に持ち込んでしまっているとも言え，これは帰国後の適応を妨げることにつながると考えられる。

帰国子女を受け入れる状況の違いについては，帰国子女自身が自らの学校適応に寄与する要因として，周囲の一般生の海外への関心の高さを挙げた。それは形式的な面では帰国子女の所属する「科」の違いや学校環境の違いということに帰することができる。本研究の面接対象者が通学する学校は，ある私立高校以外はいずれも周囲に「自由な雰囲気を持つ」と評されている学校である。海外では「日本の学校は厳しい」という情報が行きわたっており，多くの面接対象者から「思っていたより厳しくなく，ほっとした」といった感想が述べられている。帰国子女教育の実際的な内容と校則などによる学校の雰囲気，周囲の一般生の態度などに関連がみられた。帰国子女の受け入れ校となり，語学教育などのカリキュラムも組まれ国際理解教育への取り組みが進められている学校や学科では周囲の生徒の雰囲気も帰国子女に対して肯定的であるといえよう。

全体的考察

本研究では，海外滞在時においても帰国後においても，広がりを持ったソーシャル・サポート・ネットワークを形成して行くことが，帰国後の適応感に重要な影響を及ぼしていることが明らかになった。

帰国子女を受け入れる環境としては国際化教育，語学教育に対する積極的な姿勢を示している学科（学校）には，自ずとそういったことに関心のある生徒が集まり，さらに関心を高めるような学習が進められる中で帰国子女の海外体験に積極的に関心を示す雰囲気があることが示された。

しかし，このように教育現場においても国際化が進められ周囲の関心も高まっている一方で，周囲が期待するほどの帰国子女としての属性（国際性，言語力など）を身につけないまま帰国する生徒達も多い。従って「期待された属性」を身につけていない帰国子女達は，あまり関心をもたれていない場所では居心地が悪く，関心をもたれている場所ではその期待に答えることができないというジレンマに陥ってしまうのである。

これまで「帰国子女が国際性を身につけている」ことは当然のことのように扱われてきたが，国際性を身につけていることを求められるために苦しむ帰国子女については取り上げられていない。「期待された属性」を身につけている帰国子女が社会的に脚光を浴び，ますます注目が高まる中で，以上のような問題もこれから深刻になっていくことが考えられ，今後の帰国子女研究の新しい視点となるであろう。